



Title	<図書紹介>藤田治彦著『天体の図像学：西洋美術に描かれた宇宙』
Author(s)	渡邊, 眞
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤田治彦著

『天体の図像学——西洋美術に描かれた宇宙』

八坂書房／2006年

渡邊 眞／京都市立芸術大学

藤田さんには驚かされる。いつこのような研究をしていたのかと。そういえば本書の前身といえそうなのが『風景画の光』(1989)である。本書では、主題は「光」から「太陽と月」を中心とする天体へと変わり、取り上げる作品は、建築彫刻から宗教画、風景画へ、時代は古代ギリシア時代から近・現代までと、『天体の図像学』にふさわしい広大さを内包し、西洋美術世界の旅への誘いとなっている。

美術に表現された天体、その代表が「太陽と月」である。旅の第一歩は、ギリシア神殿(パルテノン)の破風に表現された建築装飾彫刻である。パルテノン神殿の東破風には、向かって左端から太陽神ヘリオスが四頭立ての戦車に乗って海面から浮かび上がり、右端では月の女神セレネが水面に没しようとする様子が表現されているという。ギリシア神に託された太陽と月の表現である。明確な図像表現としては、ギリシアの陶器に、ヘリオスとセレネの頭上にそれぞれ円形の太陽と満月が具体的に形象化されているのが見出されている。これが太陽と月をめぐるヨーロッパ美術遍歴の始まりとなる。

個人的に興味を引かれたことを二、三取り上げてみたい。ヨーロッパでキリストの磔刑図が登場するのは、5世紀頃のようなのだが、それ以後多くの磔刑図では、キリストが広げた両腕の上に太陽と月が表現される慣習が形成された。これを前提としたヤン・ヴァン・エイクの《十字架上のキリスト》の解釈はなるほどと感心した。エイクの絵画には、太陽は描かれておらず、向かって右側(キリストの左腕)のすぐ下に白い半月らしい形が見える

だけである。だから一見するだけでは月だけの表現と見誤りそうである。しかし雲の表現を見ると明らかに画面向かって左側からの光の存在、つまり太陽の存在が示唆されているのである。つまり画面上で直接には見えにくいところで慣習に対する意識が見て取れるということなのである。

もう一つ興味深かったのは、聖母ないし聖母子像の足下に月が表現されることが多いというその背景である。何気なく見ていると月が描かれていることに気がつかない場合もおおいにありそうである。紹介された絵画群をその気になって見ると、まさに月が描かれている。この慣習の始まりが、ヨハネの黙示録の記述に求められている。「また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた」。9世紀以後の黙示録の写本で造形化された図像を見出すことができ、これが聖母の足下の月のルーツだというのが納得でき面白かった。

宗教画を離れて、旅がどのような旅程となるかは、読者の楽しみとしたいが、たとえば18世紀ドナート・クレティの「天体観測」シリーズといえる絵画も、こんな絵画もあったのかと新鮮な発見であった。そして本書の最後に掲載された図像は、何故カリチャード・ハミルトンの《いったい何が今日の家庭をこれほど変え、魅力的なものにしているか》となっている。

本書は、ヨーロッパ美術の楽しみ方の提案とも受け取れる。美術の歴史を学ぶつもりでもなければ、ギリシア時代から今日までの歴

史を辿ってみる気は起こらない。ところが本書だとそれが楽しみながらできる。明確な焦点、つまり「太陽と月」を代表とする天体の図像表現という焦点が設定されているからである。どの彫刻、絵画でもこれらが主役つまり表現の主題となることはない。脇役なのに一冊の著書となるだけの作品例が集められており、それだけの作品が残されてきたということである。絵の部分的要素でしかない太陽や月なのだが、それを関心の焦点にすると、それぞれの時代や民族、地域でどのように表現されたのか、どのように継承され、どう姿を変えていくのか。これには、まず探す楽しみが加わる。とりあえず太陽か月を探す。それらしく見えるものは本当に太陽や月として描かれたのか。なぜ、どのような意味をもつのか。見るだけで見当がつかなければ、背景を調べてみればいい。まさにこのような実践の軌跡が本書である。作品や背景にまつわる叙述世界が広がって行き、確かに美術史の楽しみ方を示していると思った。

エッセイ風の著者の気ままな作品選択ではなく、歴史と地域的広がりへと誘うものとなっている。太陽や月は歴史や地域を越え、しかも重要な存在であり続けるもので、その表現にどのような想いが託されてきたか。まさに関心を捕らえて離さないテーマである。ヨーロッパ美術だけでなく、インドや中国、当然日本にあっても特有の表現の歴史が想定される。どのような図像表現があったのか。勝手な思いを表明させていただくなら、次の機会にはここまで手を広げて欲しいと著者をお願いしたい。